

文部科学省(平成24年度採択)・大学間連携共同教育推進事業

留学生との共修・協働による
長崎発グローバル人材基盤形成事業

外部評価報告書



長崎県内の10大学・短期大学

平成29年3月

卷頭言

本報告書は、長崎県内の10大学・短期大学が連携して、文部科学省（平成24年度採択）・大学間連携共同教育推進事業「留学生との共修・協働による長崎発グローバル人材育成基盤形成事業」の活動状況とそれに対する外部評価委員会による評価結果をまとめたものです。

本事業は、日本人学生と留学生が共修・協働することを通して、グローバル人材としての基盤を形成することを目標に、大学コンソーシアム長崎を基盤として、コーディネート機関の長崎大学（南部分室）と県北部のプロジェクト推進を担う長崎国際大学が柱となり、長崎県立大学、活水女子大学、長崎ウエスレヤン大学、長崎外国語大学、長崎純心大学、長崎総合科学大学、長崎女子短期大学、長崎短期大学が連携して実施しました。具体的な共修活動としては、各大学の外国語科目と、NICE キャンパス（単位互換制度）の長崎の歴史と文化科目とキャリア科目が設定され、合宿・集中形式への移行が試行されました。また、学生企画運営室は、G.E.T. (Global Entertainment Training) プログラムを創案し、交流性、体験性の高いCafeトークや学外講座等の41種類のイベントを企画・運営しました。そして、協働の場としてのインターンシップでは、留学生の受け入れ、実習時期や学生のニーズとのマッチング等で課題が見られましたが、インターンシップに参加できない短期留学生（特に秋季入学生）と日本人学生を主たる対象とした会社見学を開催するなど、効果的なキャリア教育を提供しました。また、意図的、計画的に日本人学生と留学生の協働の実質化を狙ったボランティア活動では、大学生や留学生に対する地域ニーズの高まりを背景に、ステークホルダーとの共同企画をはじめ、さまざまな分野で、各大学の所在地を中心に最大で年間26事業、361名の参加者を得ました。これらの活動による学生の能力伸長については、社会人基礎力テスト（PROG）等での評価が試みられ、「リテラシーの総合力」、「4つの力（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）」、「処理能力（言語処理能力、非言語処理能力）」、コンピテンシーの「自信創出力」の自己効力感/楽観性と「行動持続力」の主体的行動に有意な向上が見られるなど、GETプログラムや地域のステークホルダー等との調整や企画・運営による学びが、有効に働いていると示唆されました。

高齢社会が急速に進展する我が国において、地域の魅力を若い学生・留学生が共に発見・認識し、魅力ある地域を再構築していくことは、グローカルな社会の実現に向けて必要不可欠です。そのためにも、本事業を引き継ぐ大学コンソーシアム長崎の国際化をさらに進め、大学間連携の高度化と実質化を図りながら、本事業を「長崎発グローカル人材基盤形成事業」と改名して、学生主体による地域協働型の事業へ転換させる計画です。

本事業を推進するにあたり、ご協力いただいた関係機関、各位にお礼を申し上げるとともに、引き続き本事業に対するご理解とご支援をお願い申し上げます。

長崎県内大学間連携共同教育推進事業運営委員会

委員長（長崎大学） 藤本 登

目 次

本事業の目標	1
評価観点1：本事業の連携・実施体制及び評価体制について	
○大学間の連携実施体制	1
○学生企画運営室の活動	2
○連携取組の評価体制	4
○本事業への参加学生数（目標毎年度300～400人）	5
○自己評価	6
○外部評価	6
評価観点2：共修ステージ（多文化理解・語学力充実等）での活動について	
○授業科目としての共修科目	8
○授業科目以外の共修活動	8
○SNSネットワークの構築「GLNET」	11
○自己評価	12
○外部評価	12
評価観点3：協働ステージ（地域貢献、インターンシップ等の社会活動企画）での活動について	
○社会活動の実施方法	14
○社会活動（協働活動）の実施状況	14
○自己評価	17
○外部評価	17
評価観点4：本事業での獲得能力に対する到達目標の評価について	
○到達目標の評価方法	18
○グローバル人材基盤形成プログラム修了証の授与	26
○自己評価	27
○外部評価	27
評価観点5：国際化等を目指す大学コンソーシアム長崎への発展について	
○単位互換制度（NICE キャンパス）の概要とその改善	29
○大学コンソーシアム長崎の国際化	29
○自己評価	30
○外部評価	31
総合評価	32
外部評価委員会名簿	32
参考資料　○平成29年度以降の「大学間連携共同教育推進事業」の運営について	33

■本事業の目標

平成 24 年度に文部科学省に提出した本事業の申請書では、次の 2 点を達成することを目標としている。

目標 I 留学生との共修・協働を通して、国際的に通用する資質・能力・態度を身につけ、学生が希望するキャリアを獲得する。

目標 II 大学コンソーシアム長崎を国際化し、活性化するとともに、連携各大学の発展・充実を図る。

この 2 つの目標を達成するための、申請書に記載された具体的な活動内容について、5 つの観点を設けて評価することとした。評価期間は、平成 24 年 10 月から平成 29 年 3 月までの期間とする。

評価観点 1

本事業の連携・実施体制及び評価体制について

(1) 大学間の連携実施体制

大学コンソーシアム長崎が実施する諸事業については、県内大学・短期大学等理事長学長会及び、そのもとに置かれる運営委員会で具体的に協議されることとなっている。しかし、本事業については、大学コンソーシアム長崎を基盤とした事業ではあるが、その実施体制については、事業支援機構内に設置される実施運営室が、学生企画運営室とともに実施母体となり諸事業の企画・運営にあたることになっている。この実施運営室については、コンソーシアム参加大学の所在地を考慮し、南部（長崎市・諫早市・長与町）分室を長崎大学（コーディネーター室）、北部（佐世保市）分室を長崎国際大学（プロジェクト室）に置き、それぞれに地区における本事業の実施に責任を持つ。

(2) 学生企画運営室の活動

本事業の企画・運営は学生で組織する学生企画運営室が中心となる。事業支援機構の下に設置された事業実施運営室が、学生企画運営室を支援し、本事業の運営にあたる。

(3) 連携取組の評価体制

本事業の評価については、自己評価委員会と外部評価委員会において実施することとしている。自己評価委員会については、学生企画運営室や事業支援機構関係者を中心に、事業の内容や運営、学生企画運営室の活動状況について評価することとしている。外部評価委員会については、本事業のステークホルダーである企業や地方公共団体関係部局、そして学識関係者によって構成され、事業の成果を中心に評価を行うこととしている。

(4) 本事業への参加学生数（目標：毎年度 300～400 人）

本事業は、適正な規模での展開が求められることから、参加学生数（目標数）を、毎年度 300～400 人と設定している。日本人学生数と留学生数の割合については同程度とする。

■実施状況

(1) 大学間の連携・実施体制

①県内大学・短期大学等理事長・学長会

年に 1～2 回の会議を実施し、本事業の現況及び課題等について協議を行っている。平成 28 年度については、財政支援終了後の本事業の継続に向けた体制づくりを協議する委員会を設置した。

②大学間連携共同教育推進事業運営委員会

県内大学・短期大学等理事長学長会の下に設置された同運営委員会は、本事業の実施に係る専門委員会として事業計画及び円滑な連携に関する審議を行っている。委員組織としては、構成大学の教員各1名、事務職員各1名、その他連携団体（インターンシップ推進協議会、若者自立支援長崎ネットワーク）から各1名の24名で構成し、事業支援機構の機能を担保した。同運営委員会は、隔月開催を原則としている。

※事業支援機構の設置

本事業を支援するため、大学、地方公共団体、企業、連携団体等で構成する事業支援機構を同時に立ち上げ、双方が協力して事業の企画実施にあたる。」とある。本事業においては「大学間連携共同教育推進事業運営委員会」（大学教職員、長崎県、長崎県インターンシップ推進協議会、若者自立支援長崎ネットワークで構成）を設置し、事業支援機構の機能を担保した。

【大学間連携共同教育推進事業運営委員会開催実績】

- 平成25年度5回 平成26年度6回 平成27年度7回 平成28年度3回

③事業支援機構内に組織された実施運営室

長崎大学と長崎国際大学に置かれた実施運営室が、学生企画運営室と協力して事業の企画・実施にあたっている。実施運営室の体制については、下記のとおりである。

【平成24年度～平成27年度】

- 南部実施運営室の人的体制（8名）：教授1、助教1 語学コーディネーター3
(コーディネーター室) インターンシップコーディネーター2、事務補佐員1
- 北部実施運営室の人的体制（5名）：マネージャー1、語学支援コーディネーター4
(プロジェクト室)

【平成28年度】

- 南部実施運営室の人的体制（5名）：教授1、語学コーディネーター3、事務補佐員1
- 北部実施運営室の人的体制（5名）：マネージャー1、語学支援コーディネーター4

④各大学の役割

- 長崎大学：本事業が円滑に実施できるよう、運営委員会の開催や学生企画運営室の運営、及び南部地区における事業の実施に責任を持つ。
- 長崎国際大学：拠点大学として、長崎大学とともに本事業の円滑な運営、及び北部地区における事業の実施に責任を持つ。
- 他8大学：長崎大学及び長崎国際大学に協力して、各大学において本事業を推進する。

（2）学生企画運営室の活動

①学生企画運営室の設置

本事業の企画・運営にあたる学生企画運営室委員を、本事業参加学生の中から募集した。各大学からの学生企画運営室委員への参加及び内訳は下記のとおりである。

(学生企画室の会議)



(学生企画室の合宿企画会議)



大学別（日本人学生と留学生）学生企画運営室委員数

(単位：人)

大学名	内訳	平成 25 年度			平成 26 年度			平成 27 年度			平成 28 年度		
		日本 人 学 生	留 学 生	計									
県 南	長崎大学	16	9	25	11	2	13	16	2	18	17	5	22
	長崎県立大学（シ校）	3	0	3	1	1	2	2	0	2	8	0	8
	活水女子大学	1	0	1	2	0	2	2	0	2	0	5	5
	長崎ウエスレヤン大学	1	1	2	1	0	1	1	0	1	0	0	0
	長崎外国語大学	1	1	2	1	0	1	0	0	0	9	0	9
	長崎純心大学	2	0	2	2	0	2	5	0	5	4	0	4
	長崎総合科学大学	4	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	長崎女子短期大学	4	0	4	0	0	0	0	0	0	1	0	7
小 計		32	11	43	18	3	21	26	2	28	40	10	50
県 北	長崎国際大学	10	6	16	4	1	5	5	1	6	0	16	16
	長崎県立大学（佐校）	1	0	1	1	0	1	0	0	0	1	0	1
	長崎短期大学	1	1	2	1	1	2	2	0	2	2	0	2
	小 計	12	7	19	6	2	8	7	1	8	3	16	19
合 計		62			29			36			69		

②学生企画運営室の活動

県南の長崎大学、県北の長崎国際大学が中心となって学生の募集、事業の企画等の活動に取り組んでいる。その他の大学の学生企画運営室委員は、2つの拠点大学の企画に連携・協働しながら活動している。

本事業の企画・運営、あるいは参加学生の募集活動等のために下記の会議を開催した。

また、必要に応じて、「グローバル人材の育成」、「大学間連携の推進」という目標理解と企画運営力の向上を図るために、学生企画運営委員を各種シンポジウムや交流会へ派遣した。

【平成 25 年度】

○長崎大学、長崎国際大学学生企画運営会議の単独開催回数

- ・長崎大学 : 34 回

- ・長崎国際大学 : 25 回

○長崎大学と長崎国際大学の合同学生企画運営会議開催回数 : 2 回

○県南地区合同会議及び県北地区合同会議の開催回数 : 各 2 回

○10 大学合同会議の開催回数 : 1 回

○研修派遣回数 : 2 回

【平成 26 年度】

- 長崎大学、長崎国際大学学生企画運営会議の単独開催回数
 - ・長 崎 大 学 : 33 回
 - ・長崎国際大学 : 25 回
- 長崎大学と長崎国際大学の合同学生企画運営会議開催回数 : 1 回
- 県南地区合同会議及び県北地区合同会議の開催回数 : 各 2 回
- 研修派遣回数 : 1 回

【平成 27 年度】

- 長崎大学、長崎国際大学学生企画運営会議の単独開催回数
 - ・長 崎 大 学 : 36 回
 - ・長崎国際大学 : 24 回
- 長崎大学と長崎国際大学の合同学生企画運営会議開催回数 2 回 (TV 遠隔含む)
- 県南地区合同会議及び県北地区合同会議の開催回数 : 各 4 回

【平成 28 年度】

- 長崎大学、長崎国際大学学生企画運営会議の単独開催回数
 - ・長 崎 大 学 : 25 回
 - ・長崎国際大学 : 15 回
- 長崎大学と長崎国際大学の合同学生企画運営会議開催回数 : 1 回 (TV 遠隔)
- 県南地区合同会議及び県北地区合同会議の開催回数 : 各 2 回
- 研修派遣回数 1 回

(TV 遠隔会議)



(県南・県北合同会議)



(3) 連携取組の評価体制

①自己評価委員会の概要

自己評価委員会規約を制定し、本事業運営委員会正副委員長及び委員 2 名以内、学生企画運営室委員から 2 名以内、その他委員長が必要と認める者 2 名以内 (合計 8 名以内) によって委員会を構成し、「事業内容・運営、進捗状況及び事業の成果に関する評価」を任務とした。

②外部評価委員会

外部評価委員会規約を制定し、委員構成を企業関係者 2 名以内、地方公共団体関係者 2 名以内、大学関係者 2 名以内、公募委員 2 名以内 (合計 8 名以内) で委員会を構成している。任務としては、自己評価委員会と同じく「事業内容・運営、進捗状況及び事業の成果に関する評価」である。

(4) 本事業への参加学生数（目標：毎年度 300～400 人）

①募集方法

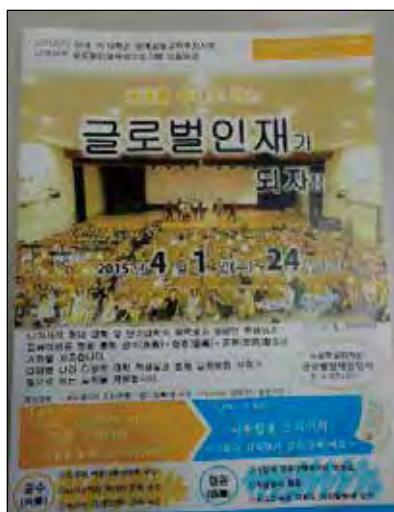
本事業の趣旨、活動実績等を記載したリーフレット（日本語、英語、中国語、韓国語）を、各大学において、春季及び秋季の入学生オリエンテーション等で配布し、学生企画運営委員等が説明の上、募集を行ってきた。本事業に参加を希望する学生は、申込書を各大学に提出する方法とした。

なお、年度途中で参加を希望した学生についても申し込みを受理している。

②参加学生数

事業の実施体制の整備により、各年度目標数を大幅に超える学生の参加を得ることができた。平成 25 年度以降の参加学生数及びその内訳については下記のとおりである。

(韓国語リーフレット)



(募集説明会)



大学別本事業参加学生数

(単位：人)

大学名	25 年度		26 年度		27 年度		28 年度	
	日本人 学 生	留学生						
長崎大学	161	116	115	143	82	129	67	164
長崎国際大学	22	24	30	44	25	47	5	46
長崎県立大学	21	6	34	5	18	0	23	2
活水女子大学	4	9	1	1	2	0	0	5
長崎ウエスレヤン大学	2	2	10	4	103	34	161	55
長崎外国語大学	1	4	8	6	8	0	14	0
長崎純心大学	8	4	9	5	9	0	10	0
長崎総合科学大学	0	0	8	0	11	0	2	0
長崎女子短期大学	5	0	9	0	1	0	0	0
長崎短期大学	30	48	30	0	33	0	30	0
小計	254	213	254	208	292	210	312	272
合計	467		462		502		584	

【自 己 評 価】

(1) 大学間の連携実施体制

本事業の企画・運営を行う協議機関である運営委員会の下に実施・活動を指導・紹介する機関として実施運営室を設けた。地理的制約による活動範囲を考慮して、県南地区を長崎大学、県北地区を長崎国際大学に実施運営室を設け、それぞれが拠点大学の役割を担い、地区内の大学との連携に努めた。これらの体制によって、大学間の連携を保ち、諸般の活動を円滑に実施した。

(2) 学生企画運営室の活動

本事業の企画・運営の実質的担い手は、この学生企画運営室である。大学間連携を基盤にした共修・協働のイベントを実施するため、年間に相当数の会議を開催するとともに、活発に行動したことは、高く評価できる。

(3) 連携取組の評価体制

規約に則り、これまで外部評価を1回、自己評価を2回実施した。それぞれの評価結果を受け、その後の事業運営の改善に努めた。特に、評価の可視化に関しては、鋭意取り組んだ。

(4) 本事業への参加学生数（目標毎年度300～400人）

目標数を超える、外国人留学生も多かったことから、本事業が目指すグローバル人材基盤形成への取組を推進できた。その一方、2年間継続して本事業に参加できない短期留学生や活動を継続できない多くの学生がいたことから学生の本事業に対するモチベーションを、如何に維持させるかが大きな課題として残った。

【外 部 評 価 意 見】

- ・大学間で多少の違いはあるものの、学生企画運営室の活動は突出しており、連携、実施体制は評価できる。課題も十分理解されており、今後の持続的な活動にも反映いただきたい。
- ・大学によって事業への取り組みに関する温度差がある点は残念ではあるが、当事業への参加増や体制強化への努力については一定の成果が上がっており、評価できる。
- ・実施体制としては、全体的に評価できる。特に、地理的制約の中で、県南・県北の2つの体制で学生企画運営室が積極的に活動を引っ張っていく努力は特筆すべきことである。拠点校以外の大学の頑張りを期待する。
- ・学生主体の活動とフォローアップにより、活動が活発化したものと評価する。全体的な課題はリーダーシップのある学生を発掘することと、学生の興味を呼び込む求心力と考える。参加学生は適正規模と思われる。

- ・学生企画室の活動がこの事業の大きな柱と思われる。そこに参加している学生は主体的に取り組んでいることが分かるし、活動が非常に活発である点は、高く評価できる。地理的な特性を考えて、南北で活動している点もよいと思う。特に北部は人数が少ないながらもの活発に活動されている。一方、参加人数とその年次推移を見ると大学の取り組み方に差（意識の差でしょうか）を感じる。所属大学に人が少なくとも、このプログラムに参加すれば、学びが広がるという点では、人数が少ないことが問題とは思わない。責任体制がしっかりしている点も高く評価できる。
(1)大学間の連携には、まだ少し課題があるよう思う。
(2)外部評価委員を早く決め、活動の現場を見て評価する体制にしてはどうか。
- ・事業の企画・運営を行う協議機関である運営委員会の下に実施運営室が設けられた。活動範囲を広げるために、実施運営室が県南地区の長崎大学、県北地区の長崎国際大学にそれぞれ設けられ、地区の拠点大学の役割を果たした。それにより大学間の連携が保たれ、諸活動が円滑に実施された。
- ・事業の企画・運営の実質的担い手を学生企画運営室が務めた。大学間連携を基盤にした共修・協働の取組を実施するため、年間に数多くの会議を開催し、活発に行動した。
- ・外部評価が1回、自己評価が2回実施された。それぞれの評価結果を受け、その後の事業運営の改善に努めた。
- ・目標数を超え、外国人留学生も数多く参加した。事業が目指すグローバル人材基盤形成への取組が推進された。

評価観点2

共修ステージ（多文化理解・語学力充実等）での活動について

（1）授業科目としての共修科目

各大学の教育の特色を生かした形で提供される「長崎の歴史と文化科目」、「キャリア教育科目」及び「外国語コミュニケーション科目」を参加学生に共修させ、グローバル人材としてのキャリア形成に欠かせない多文化理解能力と語学力を修得させる。

（2）授業科目以外の共修活動

本事業の申請段階では、この活動についての記載はないが、学生が創案したグローバル人材基盤形成プログラムは、現在では本事業におけるきわめて重要な共修活動となっている。

（3）SNS ネットワーク「GLNET」の構築

遠隔教育システム、自学自習システム、SNS（グループネットと全体ネット）を整備し、留学生と日本人学生の共修・協働グループでの学びと交流、相互啓発を図る。

■実施状況

(1) 授業科目としての共修科目

「大学間連携共同教育推進事業運営委員会」において定めた1、2年次において履修すべき共修科目は、下記のとおりである。

- ①外 国 語 科 目 : 各大学が卒業要件として定めている1・2年次の外国語科目を自大学開講科目の中から修得する。
- ②長崎の歴史と文化科目 : 各大学等が指定する自大学の開講科目又はNICE キャンパスの単位互換科目の中から2単位以上修得する。
- ③キ ャ リ ア 科 目 : 各大学等が指定する自大学の開講科目又はNICE キャンパスの単位互換科目の中から2単位以上修得する。

留学生が在籍していない大学・短期大学がある中で、10大学連携による留学生と日本人学生の共修活動の充実を図るために、NICE キャンパス（単位互換制度）の活用が不可欠である。各大学開設の授業科目が課される「外国語科目」を除く「キャリア科目」及び「長崎の歴史と文化科目」についてはNICE キャンパスの単位互換科目を、履修可能科目として指定してきた。しかし、既設の自大学開設講座中心の単位互換科目の設定では、授業時間帯が異なることや地理的制約から活用が進まない実態があった。

そこで、平成25年度に、合宿・集中型の「考え方！自分のキャリアデザインⅠ」、「考え方！自分のキャリアデザインⅡ」、平成27年度には、同じく合宿・集中型の「高めよう！プレゼンテーション力」を開講し、単位互換に係る課題が改善されてきつつある。その一方、「長崎の歴史と文化科目」については、各大学開設授業の活用を促しているが、依然として課題が残されている。

単位互換の状況（自大学の学生を含まない単位互換履修生数）(単位：人)

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度
大学数	5	5	4	5
学生数	85 (649)	109 (437)	90 (475)	80 (367)

（ ）内は自大学の受講学生を含む共修科目受講生総数

(2) 授業科目以外の共修活動

申請書提出の段階では、授業での共修のみが本事業における留学生との共修活動として位置づけられていた。しかし、授業科目の共修については、確かに教室内で時間と空間は共有するが、実質的な共修が成立しているのかという疑問から、留学生と日本人学生がface to faceのコミュニケーションがとれる共修プログラム構築の必要性が示された。この課題の解決を図るために、学生企画運営室は、「グローバル人材に求められる資質とは?」、「大学間連携の実質化を図るために何が必要か?」という基本的な命題に、多くの時間を費やして議論を重ねてきた。その結果として、留学生との交流活動の日常化、活性化を図るという視点から生まれ出されたのが、学生企画運営室創案のG.E.T. (Global Entertainment Training) プログラムである。Cafe トークや学外講座等の各種講座等、下記に示す交流性、体験性の高い多様なアクティビティが企画・運営され、共修活動の実質化に大きく寄与している。

例えば、GET プログラムの一環として実施されるWCD（ワールド・カルチャー・デー）においては、共修科目である「長崎の歴史と文化科目」の体験活動として、平戸市や島原市における学外講座、ハタ揚げや節分等、長崎（日本）の伝統行事に触れるイベント等を実施してきた。

(Cafe トーク)



(ひな祭り講座)



(節分祭り)



(ハタ揚げ)



また、日本企業への強い関心を持ちながらも、インターンシップに参加できない短期留学生（特に秋季入学生）と日本人学生を主たる対象として、会社見学会等を計画的に実施してきた。ジャパネットたかた、三菱重工長崎造船所、ダイヤソルト、酒や醤油の醸造所等の訪問は、日本人学生と留学生の交流の場となるとともに、効果的なキャリア教育の場ともなっている。

会社訪問（GET プログラム）の実施状況

	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
会 社 名	株式会社イズミ ゆめタウン夢彩都 メットライフ生命保険株式会社 三菱重工業株式会社 長崎造船所 株式会社大島造船所 ダイヤソルト株式会社 出津文化村	長崎県窯業技術センター 波佐見町陶芸の館 くらわん館 長工醤油味噌協同組合 大村工場	ジャパネット たかた 梅ヶ枝酒造
アンケート調査 結果参加者の感想 (平成 28 年度)	<ul style="list-style-type: none"> ・私が語学勉強を通して何をしようか考える時間になりました。 ・Corporate culture is very good and I've learned so much. ・ジャパネット会社での見学を通して本当によく勉強しました。 最後の社長さんの発言が深く印象に残りました。必ず人を感じる心を持って、勇気を持って頑張ります。 ・日本の伝統の文化に生で触れることが出来た。実際に試飲することも身近に感じることが出来たので良かった。 ・甘酒がおいしい。伝統的な作り方をちゃんと守っていました。 ・たのしかった。日本の文化を知れた。 		

さらには、食の多文化理解（多国籍料理交流イベント）に努めたり、日本の習俗理解（餅つき大会）を行ったりするなどして、共修活動を通して、多文化理解にも努めてきた。

加えて、平成26年度以降「GET」、「Change」、「Future」をテーマに、10大学連携事業として実施してきた「プレゼンテーション大会」は本事業の象徴的なプログラムである。学生企画運営室の企画と単位互換科目（コーディネート科目「高めよう！プレゼンテーション力」）が連携し、プレゼンテーション関連のNPO「ドリームプラン長崎」とも協働しながら、県内10大学の学生が運営してきた。平成28年度については、多くの参加者を集め、長崎大学長をはじめ県内4大学の学長が審査員に加わり、大々的に開催されている。プレゼンターとして参加する学生も年々増加してきている。ここでは、中国、台湾、韓国、マレーシア、バングラデシュなどからの留学生がプレゼンターとして活躍している。なお、優れたプレゼンターに対しては、県内大学・短期大学等理事長・学長会長名で賞状等が授与されている。

平成28年度からは、プレゼンテーション大会に加え、学生企画運営室主催事業として、新たに「ディベート大会」を実施してきたところである。

(プレゼンテーション大会)



(ディベート大会)



GETの実施状況

(単数実施：○、複数実施：◎)

イベント名	年 度				備 考
	25	26	27	28	
Cafeトーク	◎	◎	◎	◎	県南
プレゼンテーション力育成講座	◎				県南
国際人になろう！交流イベント	○				共通
長崎平和大学への参加	◎			○	県南
JAPANES CULTURE DAY	◎				県南
日本語講座	◎				県南
本事業のプログラム説明会	◎	◎	◎	◎	県南
クリスマスパーティ	○	○	○	○	県南
学生プレゼンテーション	○	○	○	○	県北
雲仙学外講座	○		○	○	県北
平戸学外講座	○		○		県北
長崎学外講座（長崎の和華欄文化を学ぶ）		○			県北

GETの実施状況

(単数実施：○、複数実施：◎)

イベント名	年 度				備 考
	25	26	27	28	
島原学外講座		○			県北
多国籍料理交流イベント	◎	◎	◎	○	県北
クリスマスクッキー交流会・新春餅つき大会	○		○	○	県北
英会話支援	◎	◎	◎	◎	県北
韓国語支援	◎	◎	◎	◎	県北
中国語支援	◎	◎	◎	◎	県北
日本語支援	◎	◎	◎	◎	県北
プレゼンテーション講座		◎	◎	◎	県南・県北
プレゼンテーション予選会		◎	◎	◎	県南・県北
プレゼンテーション大会		○	○	○	共通
体験しよう！世界の遊び		○	○	○	共通
会社見学会		◎	○	○	県南
WORLD CULTURE DAY		◎	◎	◎	共通
G☆Munchies (交流会)		◎			県北
G P 学生研修合宿		○	○	○	県北
高めよう!プレゼン力 (Nice Campus)			◎	◎	共通
考えよう! キャリアデザイン (Nice Campus)	◎	◎	◎	◎	共通
留学生 Welcome Party		○	○	○	県南
留学生 さよなら Party		○	○	○	県南
The Nagasaki 見聞録		○			県南
新入生歓迎 Café トーク			○	◎	県南
Café トークウェスレヤン大学遠征			○		県南
Café トーク県立シーボルト校遠征				○	県南
Café トーク長崎外国大学遠征		○	○	○	県南
Café トーク長崎純心大学遠征			○		県南
県南学生企画室合宿			○	○	県南
国際大との交流イベント	○	○			共通
長崎平戸研修 Hirado Field Trip				○	県南

(3) SNS ネットワーク「GLNET」の構築

「本プログラムに参加している学生間のコミュニケーションを促進し、相互に啓発し合いながらグローバル人材としての基礎力を培う」ことを目的に、SNS ネットワークである「GLNET」を構築し、平成 25 年 6 月から運用を開始した。このネットワークは数種類のコミュニティ（①大学共通、②自大学内、③ 10 大学学生企画運営室、④自大学学生企画運営室、⑤県南地区学生企画運営室 ⑥県北地区学生企画運営室など）に分化されており、目的に応じたコミュニティ間の利用が可能になっている。

自学自習システムとしても利用可能で、共修科目のひとつである「高めよう！プレゼンテーション力」等の講義や当日使用したレジュメなども公開し、復習教材あるいは欠席者対応にも活用できるようにした。

このシステムを利用するには、ID 番号やパスワードを入力する必要があり、この煩わしさから学生が本システムにアクセスしない傾向があった。そこで、学生企画運営室や実施運営室は本システム活用

性の利便性について周知を図るとともに、アクセスの促進について参加学生への啓発を進めてきた。その一方で face book 内に長崎発グローバル人材育成プログラム学生企画運営室のページを開設したり、学生企画運営室広報担当がツイッターにアカウントを開設したりして、イベントの告知や開催状況の報告等に活用している。また、学生企画運営室委員については、LINE でグループをつくり、会議開催やイベント等の連絡ツールとして活用している。

このほか、南北に長いという地理的条件を考慮し、南北学生企画運営室会議、プレゼンテーション講座等の授業等に遠隔授業システムを用い、より効率的な事業運営に努めてきたところである。

【自己評価】

(1) 授業科目としての共修科目

県内大学の日本人学生と留学生が同じ授業科目を共修する中で、多文化理解能力と語学力を修得させ、グローバル人材基盤形成を目指すという目標に対し、事業当初、他大学学生と共に修できる科目が少ないのが課題であった。そこで、NICE キャンパス科目に新設科目を設け、合宿型や集中型による講義を取り入れ、受講者を増やすことに努めた。

(2) 授業科目以外の共修活動

「c a f e トーク」、「プレゼンテーション講座・大会」、「学外講座」等の各種講座をG E T (Global Entertainment Training) プログラムとして位置付けた。数多く企画・運営された本プログラムが、授業科目以外の実質的な共修・協働の場となっていることから、高く評価できる。

(3) SNS ネットワーク 「G L N E T」 の構築

「G L N E T」 の利用として、日本人学生と留学生とのグループ交流や学生の自学自習等としても活用する計画であったが、活用できたのは数個の講座コンテンツと参加学生への連絡事項伝達やブログとしての利用に留まった。このため、face book 内に学生企画運営室ページを開設し、イベントの告知や開催状況の報告等を行う等、利用し易い方法を見出して活用しており、連絡事項の伝達に支障は生じなかった。

【外部評価意見】

- ・GET プログラムのみでも十分と考えるが、更なる活性化を目指すとすれば、(1) の授業科目の受講しやすい環境の整備が必要と考える。SNS に関しては、「コミュニケーションしやすいこと」が重要であり、GLNET に固執する必要はないと考える。
- ・共修科目についても合宿型、集中型、遠隔型と様々な工夫がなされ、設定されている。何よりも GET プログラムやプレゼンテーション講座の実施は学生達に大きな自信を与えており、是非これからも続けていただきたい。
- ・NICE キャンパスの活用が進まない中で合宿・集中型キャリア科目が設定されたことは評価できる。GET プログラムの多様なアクティビティが学生によって企画運営されており、本事業の共修の核になっていることは評価に値する。

- ・地理的な違いや大学間の違いを越える取り組みとして GET の共修は大変有効と考える。
- ・留学生の力を活用しながら日本人学生の多文化力と語学力を高める共修は有効である。
- ・せっかく立ち上げた SNS の活用が図られなかつたことは残念である。Face book 等、学生が使い易い形を取り入れたことは有効だった。
- ・他大学の単位互換科目の受講生が多いとは言えない。時間割上の問題等もあり、難しいことは理解できる。合宿・集中の科目を開講して改善をはかった点は評価できる。
- ・GET は学生の主体的取り組みとしても高く評価できる。企画室委員以外の学生（日本人）の参加を増やすとともによい。
- ・留学生にとっては、日本を知る機会にもなっている。日本人学生にとっては、キャリア教育の側面もあるが、日本や長崎の再発見にもつながっていてよいと思う。短期留学生を含め、留学生力を活用することはできないか。共修のプログラムとしては日本人学生が外国のことを知る機会ももう少しあるとよい。
- ・独自に開発された SNS は利用がいまひとつであるが、学生が利用しやすいのであれば既存の（外部の）SNS を活用することもよいと思う。独自の SNS については機能を特化して使用していくはどうか。
- ・多文化理解能力と語学力を修得させ、グローバル人材基盤形成を目指すという目標のもと、長崎県内大学の日本人学生と留学生が同じ授業科目を共修した。事業当初、共修できる科目が少ないのが課題であった。そこで、NICE キャンパス科目に新たに科目が設けられ、合宿型や集中型による講義も取り入れ、受講者を増やすことに努力された。
- ・「c a f e トーク」、「プレゼンテーション講座・大会」、「学外講座」等の各種講座が G E T (Global Entertainment Training) プログラムとして位置付けられた。数多く企画・運営されたプログラムが、授業科目以外の実質的な共修・協働の場となった。

評価観点 3 協働ステージ（地域貢献、インターンシップ等社会活動企画）での活動について

（1）社会活動の実施方法

学生企画運営室は、地方公共団体、企業及び連携団体等に働きかけて、日本人学生と留学生の共修・協働の場の整備を行う。この整備依頼等については、事業支援機構（実施運営室）が協力する。

（2）社会活動（協働活動）の実施状況

日本人学生と留学生が一緒になって、地方公共団体や企業等でインターンシップを行ったり、県内各地域においてボランティアなどの社会活動を行ったりする。

この過程で、様々なハードルに直面すること等を通して、自らの不足する能力・資質に気づき、今後の学習や現場力養成の動機づけを行う。

■実施状況

(1) 社会活動の実施方法

①インターンシップの実施方法

インターンシップは、2年次での実施を原則とするが、その実施方法については、県南地区と県北地区で異なった実施方法をとっている。

【県南地区】

平成26年度から、インターンシップを実施している。事業支援機構（実施運営室＝コーディネーター室）は、インターンシップ、特に留学生の受け入れ企業を独自に開拓し、約60名分の学生受け入れを確保している。インターンシップの受け付けについては、独自開拓分も含めて、インターンシップ推進協議会を窓口として統一することとした。

【県北地区】

県北の事業支援機構（実施運営室＝プロジェクト室）が、学生企画運営室と協力して、独自開拓した企業等において実施に向けた活動を行った。

なお、両者は協力して、本事業広報用パンフレットを作成し、関係企業・機関等を訪問し、インターンシップ受け入れについて協力要請を行ってきてている。

②地域貢献（ボランティア）の実施方法

インターンシップとともに実質的な協働体験ができる地域貢献（ボランティア）活動を、本事業の重要な活動と位置付けている。この地域貢献（ボランティア）活動について、大学間連携共同教育推進事業運営委員会で検討した結果、以下のような統一基準で実施することにした。

○地域貢献（ボランティア）活動の認定及び管理は各大学で実施する。

○地域貢献（ボランティア）活動は、留学生と日本人学生の協働を原則とするが、結果として日本人学生のみ、留学生のみの活動も可とする。

○地域貢献（ボランティア）活動終了後は、活動証明書及び活動日録を提出させる。

○県南地区大学においては、長崎大学内に設置されている「Uサポ、やってみゅーでスク」と連携して実施する。

(2) 社会活動（協働活動）の実施状況

①インターンシップの実施状況について

インターンシップについては、その実施過程で下記に示す問題点から、協働活動の困難性が指摘されている。

○2年次のインターンシップで単位化されていないこと。

○留学生の受入企業が少ないこと。

○時期的に、本事業参加の秋季入学の短期留学生（特別聴講生）に対するインターンシップの実施が困難であること。

○中小の事業所が多く、一企業等のインターンシップ受入数が少ないとために、日本人学生と留学生の協働が成立しづらいこと。

そこで、受入先の独自開拓を進めるとともに、平成 26 年度からインターンシップ推進協議会に窓口を一本化することにより、インターンシップ推進協議会受入企業に、独自開拓分を加え、インターンシップ先の選択肢を拡大する取組を進めてきた。併せて、先に示した GET プログラムの中で「企業訪問」を実施し、短期留学生を含め、日本の企業に触れる機会を充実し、共修・協働の実質化を図った。特に留学生の本県企業に対する関心はきわめて高く企業訪問には多くの留学生が参画した。

しかし、上記課題によりインターンシップについては十分に成果を上げるところまで至っておらず、今後の課題として残されている。

インターンシップの実施状況

(単位：人)

企業等	内訳	受 入 数			
		平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度	平成 28 年度
株式会社 三丹		1			
東芝三菱電機産業システム株式会社		1			
長崎文化放送株式会社		3	2	2	
社会福祉法人輝会		1			
福德不動産		1	2	1	
株式会社 KTN ソサエティ		2	5		
株式会社リンク		1			
株式会社稻佐山観光ホテル			2	2	3
株式会社東海貿易			1		
株式会社石丸文行堂			2	2	
小浜伊勢屋旅館			3	3	
諫訪神社				2	2
長崎温泉やすらぎ伊王島				2	5
株式会社ベック				1	
長崎県					1
合 計		10	17	15	11

②地域貢献（ボランティア）活動の実施状況について

ボランティア活動は、GET プログラムとともに、日本人学生と留学生の意図的、計画的に協働を実質化する上で、きわめて有効なプログラムとなっている。大学生や留学生に対する地域ニーズの高まりを背景に、ステークホルダーとの共同企画はじめ、様々な分野で、各大学所在地を中心に協働活動が実施されている。なお、ボランティア活動の内容については、日本人学生と留学生の協働を前提として、下記の観点を踏まえながら活動内容の選定にあたっている。

- ・ 地域のステークホルダーとの協働性が高い活動
 - ・ 外国人等との交流が期待できる活動
 - ・ 多文化交流が可能な活動
 - ・ 我が国及び本県の歴史・文化に触れる活動
 - ・ 地域貢献性の高い活動
 - ・ キャリア形成に有効な活動
- など

ボランティア活動の選定・実施にあたっては、上記観点をボランティア所管部署（U サポ、やってみゆーでスク等）と共有し、本事業趣旨に沿った活動が常時実施できるよう情報交換の日常化を図っているところである。

(平成 25 年度)

ボランティア名	参加者数
The Star Festival	2
西海市障がい者ビーチスポーツ大会運営補助	2
創平会納涼祭ボランティア	4
コスモス苑収穫祭ボランティア	6
平戸市上段の野焼き草刈り補助	7
佐世保スピカ祭りボランティア	10
科学の祭典	3
未来の科学者養成講座	2
新年もちつき大会	4
ランタンフェスティバル	16
育シリーズ サイエンスピクニック	9

(平成 27 年度)

ボランティア名	参加者数
創平会いきいき祭りボランティア	7
国道沿いの花植えボランティア	18
片島竹灯籠まつり事前準備ボランティア	10
ながさきサンセットロード清掃ボランティア	16
長崎帆船まつり	34
クルーズ客船通訳ガイド	6
長崎がんばらんば大会	61
世界こども平和会議	9
GO!GO!こども王国	5
ながさき 100 km 徒歩の旅	8
海ごみ Knights in 五島	9
長崎国体	5
長崎キッズハロウィンパーティー	6
大中尾棚田火祭り	27
サイエンスファイト	6
ドリプラ長崎 2014	9
門松作り	5
花丘町自治会もちつき大会	3
育シリーズ サイエンスピクニック	6
ランタンフェスティバル	33
ながさきグリーンキャンペーン	10
あぐりの丘オリーブ植樹	5

(平成 26 年度)

ボランティア名	参加者数
長崎帆船まつり	34
クルーズ客船通訳ガイド	6
長崎がんばらんば大会	61
世界こども平和会議	9
GO!GO!こども王国	5
ながさき 100 km 徒歩の旅	8
海ごみ Knights in 五島	9
長崎国体	5
長崎キッズハロウィンパーティー	6
大中尾棚田火祭り	27
サイエンスファイト	6
ドリプラ長崎 2014	9
門松作り	5
花丘町自治会もちつき大会	3
育シリーズ サイエンスピクニック	6
ランタンフェスティバル	33
ながさきグリーンキャンペーン	10
あぐりの丘オリーブ植樹	5
障がい者介護ボランティア	2
長崎がんばらんば大会リハーサル大会補助	13
国道沿いの花植えボランティア	19
西海市障がい者ビーチスポーツ大会補助	4
創平会いきいき祭りボランティア	9
長崎がんばらんば大会補助	45
平戸ツーデーウォークボランティア	10
平戸市上段の野焼き草刈り補助	12

(平成 28 年度)

ボランティア名	参加者数
あしなが学生募金	3
サッカー試合運営スタッフ	5
鶴南特別養護学校運動会スタッフ	4
青少年ピースボランティア	3
クルーズ客船通訳ガイド	10
五島市イングリッシュキャンプ	23
そうめん流し体験 1	1
大中尾棚田火祭り	26
ながさき国際協力・交流フェスティバル	3
ながさきサンセットロード清掃	2
長崎キッズハロウィンパーティー	6
NAGASAKI フェスティバル	5
創平会いきいき祭りボランティア	13
国道沿いの花植えボランティア	13
ながさきサンセットロード清掃ボランティア	18
平戸市上段の野焼き草刈り補助	13

【自己評価】

(1) 社会活動の実施方法

インターンシップについては、県南地区において長崎インターンシップ推進協議会の協力を得て、安定的に実施できたことは大きな成果であった。その一方、短期留学生が多く、企業等とのマッチングが困難、或いは単位化されていないこと等の事情により結果的に参加者数が少なかった。このため、参加学生（特に短期留学生）の要望を踏まえ、別途会社訪問を実施してきた。参加者からのアンケート調査結果からも好評であったことが窺え、意義ある共修・協働企画として、その役割を果たした。

(2) 社会活動（協働活動）の実施状況

紹介されるボランティアは様々であり、この対応の為、本運営委員会で統一基準を設けて受け入れ、本事業の重要な活動に位置付けた。基準の中には、県南地区の長崎大学内に設置されている「Uサポ、やってみゆーでスク」との連携を盛り込み、安心安全を優先する受入体制を整えた。この状況下、学生は活発に社会活動し地域貢献した。

【外部評価意見】

- ・インターンシップ先が少ないことの課題はあるものの、ボランティアはじめ、会社訪問などの工夫もされており、概ね活発に活動を行っていると考える。企業側の社会貢献という視点で受け入れ企業を増やすべく他団体（JC、YEG、業界団体等）との連携も必要である。
- ・県内企業へのインターンシップ受け入れの要請について相当な努力をしている点は理解できる。更なる努力を願いたい。
- ・インターンシップの受入については、企業の理解・協力が不可欠である。人口減少の中で県内若者の優れた労働力の確保のためにも、県内の産官学が連携し取り組んでいくことを明記したらどうだろうか。
- ・インターンシップ推進協議会の協力等はあるものの、マッチングの困難さから数が伸びなかつたことは懸念される。大学コンソを含め社会で協力しあう体制づくりのため、価値ある学生の育成面をアピールし、企業の理解を求めてほしい。
- ・ボランティアは地域との協力のもとに地域貢献性の高い活動を選定され、数多く実施されている点を評価する。
- ・インターンシップ先を見つけるために、相当の努力がなされている点は高く評価できる。本事業の中（枠）だけでの開拓には限界がある。企画にも、採用活動にもつながる（直接的ではなくとも）ことを理解して頂けるよう、もう少し大きな産官学の協議が必要ではないか。

- ・インターンシップの共修・協働は受入先あってのことであるから、今後も難しいと思う。ボランティアや地域社会との協力をメインとして、長崎らしい取り組みを中心にしてはどうか。地域貢献活動が増えてきた点は高く評価できるので、もう少し視点もかえて、(留学生力の活用、卒論のようなものとのリンクなど) 広げていくと良いのではないか。
- ・インターンシップについては、県南地区において長崎インターンシップ推進協議会の協力を得て、安定期に実施できた。しかし、短期留学生が多く、企業等とのマッチングが難しかった。このため、参加学生（特に短期留学生）の要望を踏まえ、別途会社訪問が実施された。参加者へのアンケート調査結果によると会社訪問は好評であった。
- ・様々なボランティア依頼があった。運営委員会で統一基準を設けて受け入れ、本事業の重要な活動に位置付けられた。学生は活発に社会活動し地域貢献した。

評価観点4

本事業での獲得能力に対する到達目標の評価について

(1) 到達目標の評価方法

本事業参加学生が獲得すべき能力・態度として、以下を掲げている。

- 高い多文化理解能力
- 他の言語を用いた高いコミュニケーション能力
- 課題を見極め、解決する企画力
- 主体的な行動力
- 社会貢献に対する高い意欲

本事業申請書においては、上記能力の獲得状況、学修状況について以下の方法を用いて行うこととしている。

異文化適応力や社会人基礎力テスト等市販されているテストでの評価

カンファレンスやプレゼンテーションでの評価

□TOEIC等外部検定試験での評価 (TOEIC 750点以上　日本語検定1級など)

ポートフォリオによる自己評価

国際人基礎力総合的な評価 (インターンシップ、ボランティア受入先の評価)

(2) グローバル人材基盤形成プログラム修了証の授与

本事業においては、一定の要件を満たした学生に対して、県内大学・短期大学等理事長・学長会長名で修了証（名称：グローバル人材基盤形成プログラム修了証）を授与することとしている。

(1) 到達目標の評価方法

平成27年度の国による中間評価結果はB評価（一部で計画と同等又はそれ以上の取組もみられるものの、計画を下回る取組であり、本事業の目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要である）であった。特に、「成果指標の妥当性及び目標との整合性を精査し、「学生の成長をモニターできる仕組み」の早急な確立を求められた。そこで本事業目標である「留学生との共修・協働を通して、国際的に通用する資質・能力・態度を身につけ、学生が希望するキャリアを獲得する。」の視点から、その学修状況について、次のとおり行うこととした。

①社会人基礎力テスト（PROG）結果の分析について

以下の観点でテスト結果を比較検討し、学修の成果と課題の分析を行った。

ア t 検定による本事業参加者の 1 年次と 3 年次の比較

イ 2 要因の分散分析による本事業参加学生（1 期生と 2 期生）の 1 年次と 3 年次の比較

ウ 学生企画運営室委員及び一般登録学生の結果とグローバル企業で働く社会人（25～49 歳）の比較

ア. 2 期学生（現 3 年生）の 1 年次と 3 年次の比較の分析結果について

本事業参加学生 2 期生（現 3 年生）の 1 年次と 3 年次の PROG 得点の差と特徴を検討するために t 検定を行った（56 名）

【結果】

- ①コンピテンシー関連項目より、リテラシーに関する項目が 1 年次に比して 3 年次が高かった。
- ②「リテラシーの総合力」、「4 つの力（情報収集力・情報分析力・課題発見力・構想力）」、「処理能力（言語処理能力、非言語処理能力）」の、すべてのリテラシーに関する項目において 3 年次が 1 年次よりも得点が高かった。
- ③コンピテンシーにおいては、「自信創出力」の自己効力感/楽観性と、「行動持続力」の主体的行動が、3 年生時の方が 1 年生時よりも、得点が有意に高かった。
- ④一方、「感情制御力」のストレスコーピング、「計画立案力」の目標設定とリスク分析は、3 年生時の方が 1 年生時よりも、得点が有意に低かった。

【分析】

①、②について

GET プログラム等、これまでなかった事業の企画・運営を積み重ねる中で、構想—課題—情報に係る諸能力の育成が図られたものと考えられる。「知識をもとに問題解決を図る力（リテラシー）」の育成に本事業プログラムが有効であったと思料される。

③について

学生企画運営室主体の事業企画、地域のステークホルダー等との調整、運営等を経て、多くの事業を成功に導いてきたことを通じて得られた達成感等によって磨かれてきた能力であると思料される。

④について

③とは逆に、学年進行とともに活動に対する「慣れ」が生じ、活動趣旨が不明確になったり、リスク管理が甘くなったりしてきたことを物語っていることが思料される。

イ. 2 要因の分散分析による本事業参加学生（1 期生と 2 期生）の 1 年次と 3 年次の比較結果について

本事業参加学生の 1 年次と 3 年次の得点について、1 期生（現 4 年生）と 2 期生（現 3 年生）に差がみられるかを検討するために、2 要因の分散分析を行った（抽出調査：1 期生 25 名、2 期生 56 名）

【結果】

- ①「情報収集力」、「課題発見力」、「構想力」、「言語処理能力」、「非言語処理能力」、「計画立案力」は、どちらの期でも 1 年次よりも 3 年次の方が、有意に得点が高くなった。
- ②「親和力」、「協働力」、「統率力」、「感情制御力」、「行動持続力」、「課題発見力」、「実践力」は、どちらの期でも 1 年次と 3 年次にかけて有意に得点があがらなかった。
- ③「情報分析力」は、2 期生のみ、1 年次よりも 3 年次は有意に得点が高くなった。
- ④「構想力」「自信創出力」において、1 年次よりも 3 年次は有意に得点が高くなり、2 期生が 1 期生よりも有意に得点が高かった。

【分析】

①について

本事業参加学生は、授業、サークル、アルバイトに取り組む多忙な日々の中で、10大学連携という限られたリソースの中で、これまで経験のない事業を企画したり、ステークホルダーと協働したりする活動の中から培われた能力であると思料される。

今までにないことに取り組むプロセスで、先行事例、他大学、ステークホルダー等の企画や実践に触れる活動を通して培われたものと推察できる。

②について

これらは実施運営室(コーディネーター等)への依存が背景にあるものと推察できる。また、PROGが自己評価であることから1年次に比して、3年次は客観性に基づく、より厳格な振り返りが行われたことに由来するものと考えられる。

③について

この力量については本事業を継続する中で、先行事例や他大学の実践等を比較分析する活動の積み重ねの結果、伸長したものと推察できる。

④について

当初にはなかったGETプログラムの創出やステークホルダーとの連携等の活動によって、これらの力量が培われたものと思料できる。

ウ 学生企画運営室委員及び一般登録学生の結果とグローバル企業で働く社会人(25~49歳)の比較

G Pに登録して積極的に活動している学生56人のなかで、学生企画運営室委員として活動している学生(11人)と一般登録学生(45人)のPROG結果を、現在実際にグローバル企業で働いている社会人(25歳~49歳)の結果と比較した。

【結果】

- ① 社会人の基準に従えば、コンピテンシーの「対課題基礎力」と「感情制御力」において、社会人の基準には達しないものの、委員学生が一般学生よりも有意に高くなっている。
- ② 有意差はみられないものの、委員学生は「課題発見力」「自信創出力」においてグローバル社会人の基準をやや超え、「共働力」「実践力」は超えないものの近くなっている。
- ③ その他の項目で社会人の基準を上回ったものはない。

【分析】

①について

学生(日本人学生、留学生)だけでなく、社会人や子供たちとの協働の中で、意見の相違と出会うこと等により、ストレス耐性が身についたものと推察できる。また、企画会議等における委員の連携、距離の離れた他大学との連携において、大きな負荷がかかることによって得られた力量であることが推察できる。

②について

各種イベントの企画運営によって得られた成功体験や留学生との共修・協働によって身についてきつたものと推察できる。

PROGにより、教育プログラムとしての本事業の成果と課題、改善点について、ある程度見取ることは可能である。しかし、学生たちは、授業、サークル等の大学生活やアルバイトとの社会生活の中で様々な経験を重ねる中で、社会人として基礎力を身に付けてきている。従って、PROGで得られた結果を本事

業のみによって得られたものとすることは、そもそも無理があり、費用対効果という面から考えても、本プログラムの評価方法としてはPROGが適切であるとは言い難い。

②プレゼンテーション（NICE キャンパス講義）における受講学生のプレゼンテーション能力推移

- ・「体系化」、「言語」、「話し方」、「資料」、「メインメッセージ」の5項目について4段階評価
- ・講義開始時と講義終了後のプレゼンテーションの専門家（アナウンサー）による評定
- ・評価にはAAC&Uのoral communicationルーブリックを使用。
- ・各項目の専門家評価において、訓練前と訓練後において差を検討するために、t検定を実施。
- ・受講者33人（日本人31人 留学生2人：学年1年～4年）。有効データ数31人。

【結果】

体系化、言語、話し方、資料、メインメッセージの全5項目において、訓練後の方が訓練前よりも有意に得点が高くなっている。これは学生企画運営室企画事業として実施した平成26年度、NICEキャンパスの互換科目として単位化した平成27年度においても同様の結果が得られている。よって、訓練によって評価得点が上昇し、訓練効果が得られたと言える。

③TOEIC等の実施

全受験生、事業参加学生及び学生企画運営室委員の1年次、3年次の経年比較を行い、語学力の修得状況を把握する。加えて、中国語標準検定結果、韓国語能力試験等の結果についても、事業の成果資料として活用することとした。各大学のTOEICの結果（平均値）については、以下に示すとおりである。

	受験者数	1年次	3年次	差
全受験生	1年次 228名 3年次 310名	461.10	533.76	+72.66
参加学生	1年次 111名 3年次 95名	450.49	528.55	+78.06
企画室員	1年次 15名 3年次 11名	424.00	505.72	+81.72

事業参加学生、学生企画運営室委員ともに、伸び率においては、全受験生を上回ることができたが、平均には及ばなかった。TOEICについては、大学・学部などの特性（語学系大学・学部）あるいは学習期間（4大、短大）等の影響が大きく、本事業の成果を可視化する方法として適切であるかについては疑問が残るところである。

しかし、後述する学生自身によるポートフォリオ評価を踏まえたインタビュー調査によると、

○本事業での諸活動を通じて外国語の学習への関心を高めたり、語学留学を経験したりする学生が多数みられたこと。

○本事業を経験した学生は、外国人とのコミュニケーションには語学力も確かに必要だが、それ以上に相手と関わろうという積極的な姿勢・態度こそが一番大事だと考えている者が多いことなどが明らかになっている。

日本人は外国人とのコミュニケーションには、高い語学力を身に着けてから行うべきだと感じる傾向が見受けられるが、留学生と多数関わった学生の実感としては、相手に関わっていく積極性こそが最も重要で、語学力はその次に来るものだと捉える傾向があることが示されている学生たちは、そのうえで、多くの学生が語学力を高める努力を重ねており、語学力向上の基盤の形成は、本事業によって進んでいること

が推量される。一方、県北地域については、年間 100 回を超える語学学習の取組を進め、中国語標準検定（27 年度 5 級 1 名 4 級 1 名 3 級 2 名 2 級 5 名）、韓国語能力試験（27 年度 5 級 3 名 4 級 4 名等）などの実績を上げている。

④ポートフォリオ（インターンシップ、ボランティア）による自己評価とインタビュー調査

事業参加学生に対して、共修活動、協働活動（インターンシップ、ボランティア等）の実績を記録させるとともに、本事業の諸活動を通して学生がどのような成長を遂げたのかを把握するために、学生に対するグループインタビューを実施した。本事業活動を通じての学生の諸能力の変化は、計画当初に予期できるものばかりとは限らない。そのため、本事業における諸活動を通じて学生がどのような成長を遂げたのかを明らかにすることを目的としてインテビューによる質的調査を実施した。

【1. 調査対象】

本事業における諸活動によって得られた経験を言語化するために、本事業の複数の活動にわたって積極的に参加した学生群を抽出した中から、調査への協力意志を示した 23 名を対象とした。対象学生の基礎データは以下のとおりである。

表 1. 学生の性別

性別	人数	割合(%)
男性	11	47.8%
女性	12	52.2%

表 2. 学年

学年	人数	割合(%)
4 年生(1 期生)	8	34.8%
3 年生(2 期生)	7	30.4%
2 年生(3 期生)	8	34.8%

表 3. 学生の属性

属性	人数	割合(%)
日本人学生	20	87.0%
留学生	3	13.0%

表 4. 所属学部

学部	人数	割合(%)
経済学部	7	30.4%
多文化社会学部	3	13.0%
教育学部	3	13.0%
工学部	3	13.0%
環境科学部	1	4.3%
医学部	1	4.3%
歯学部	1	4.3%
他大学	4	17.4%

表 5. 学生企画委員か否か

委員	人数	割合(%)
学生企画委員	18	78.3%
非委員	5	21.7%

【2. 調査方法】

3～5 名を一組とし、半構造化インテビューによるグループインタビューを実施した。調査期間は 2016 年 9 月 29 日～10 月 19 日である。インテビューは計 6 回実施し、平均時間は 104 分であった（最短 67 分、最長 122 分）。データの解釈は、学生の語りの中から本事業への参与から得られたと考えられる経験や諸能力を単位としてコーディングし、本事業に参加した参加学生がどのような成長を行ったのかについて解釈した。

【3. 質問項目】

質問項目は主に次の 4 点である。

- ア. 参加動機
- イ. グローバル人材基盤形成プログラム修了証について
- ウ. 本事業を通じて成長した諸能力、得た経験について

エ. グローバル人材についての考え方

【4. 倫理的配慮】

調査対象者に対して説明文書をもとに、本調査の主旨、調査方法、データの扱いに関する倫理的配慮等について説明を行い、同意書への署名によって調査参加への意思を確認した。インタビューは調査参加者の希望にそって時間を設定し、予定があるなどの場合は退席を認めるものとした。また、回答したくない質問項目の場合は回答の拒否を認めることとした。個人を特定する情報については、回答者を匿名化したうえで分析を行う旨を約束し、結果の公表の際の匿名性を確保した。

【5. 分析結果】

ア. 参加動機

(1) 留学生・日本人学生との交流

参加学生が本事業の活動に参加した動機の中で最も多かったのが留学生との交流もしくは日本人学生との交流を目的としたものであった。普段の学生生活の中で、日本人学生が留学生と接する機会や、留学生が日本人学生と接する機会を得ることはほとんどない。そのため、グローバル志向や海外への関心が高い日本人学生が留学生との交流を得ることや、英語などの外国語を用いる機会を得ることを目的として本事業に参加していることがわかった。留学生については日本人学生との交流を求める目的で参加しているケースが多かった。また、参加学生は外国人学生の交流を求めるのみならず、学部や大学が異なる友達を増やしたくて参加している場合も多い。本事業はそうした様々なコミュニケーションを求める学生にとっての良い機会として機能していることがわかった。

(2) 活動の楽しさ

次に多い参加動機は、活動そのものに楽しそうな印象を感じたという理由である。入学時のオリエンテーションで告知された本事業の内容に興味を持った学生が直感的に参加し、そのまま積極的に活動を深めることになったケースが複数みられた。

(3) 自主的な企画・運営への関心

参加学生の中には、本事業の特色でもある学生自身が企画を立ち上げ、運営していく部分に関心を持ち参与した者も一定数みられた。彼らは後述する GET プログラムにおける様々な企画の立ち上げや運営に深く関与していた。

イ. グローバル人材基盤形成プログラム修了証について

本事業で所与の要件を示したものに授与される「グローバル人材基盤形成プログラム修了証」(以下修了証)について、学生がどのように感じているのかについて質問したところ、大まかに以下のような意見がみられた。以下に挙げる 3 つの学生群は、明確に分かれているわけではなく、相互に重なっている。ここでは、修了証の授与に対して積極的な群から消極的な群の順にその特徴を述べていく。

(1) 修了証の授与を望む群

この群は、修了証を積極的に受け取りたいと思う学生たちである。彼らの多くは「もらえる証書があるならばもらっておきたい」というように自分たちの経験や活動を証書という形に残したいと考える者達である。しかし、彼らの多くは、活動していくうちにこの修了証を受け取ること自体よりも、本事業内で体験できることそのもの方に意義付けを行うようになった者が多かった。

(2) 活動自体へのやりがい

積極的に参与する学生の中で大半を占めているのがこの群である。参加学生の多くは、要件を満たせば修了証がもらえることはわかっているし、実際に修了証の要件を満たしている学生も少なくない。しかし彼らはその要件を満たして修了証をもらうこと自体よりも、本事業で行われる様々な企画によって得られる体験や経験により重要な意義づけをしていることがわかった。

(3) 修了証の社会的効用に対する懐疑

参加学生の中には、修了証の社会的効用に対して懐疑的な学生も一定数いる。彼らは一大学が発行する「修了証」が、TOEICなどの一般的資格と同等のものとして社会的に扱われるのかについて懐疑的な、ある意味現実的な意見を持っており、(2)の群同様、修了証そのものにあえて肯定的な意義は見出さないうえで、活動自体に強いやりがいを感じ、積極的に参加していた。

ウ. 本事業を通じて成長した諸能力、得た経験について

(1) 外国人とのコミュニケーション能力の向上

学生の大半が感じているのが、本事業を通じて外国人とのコミュニケーション能力が向上したことであった。学生は、本事業に参加する中で留学生と関わる機会を数多く得ている。その様々な体験を通じて彼らが強く実感しているのは、外国人とのコミュニケーションにおいてはまずは積極性を持って相手と関わろうとする姿勢こそが大事だということであり、語学力はその先にあるものという認識であった。本事業に参加している留学生は日本語が流暢な者が多く、外国語を用いないとコミュニケーションをとることができないという場面は非常に限定的だということがこの背景にあるだろう。

(2) 異文化理解・自国の文化への理解

また、本事業に参加した多くの学生は異文化への理解もしくは受容力が向上したと感じている。特にカフェトークのように同じテーマで多種多様な国の留学生と話す機会を多く持った学生が語ったのは、自分と異なる文化を理解し、受容する力が向上したという話である。こうした異文化との接触体験は同時に自国の文化について見直す機会にもつながっており、日本の歴史や文化をより深く理解したいという学生も少なからずみられた。

(3) 海外・語学への関心

本事業に参加した学生は、参加前から多文化理解や外国語学習に関心の高かった学生と、参加前はそれほど海外への関心は高くなかった学生の二つに分けられる。本事業の中で留学生と関わる中で、参加前から関心の高い学生はより高いレベルの語学学習を目指すケースが多い。また、参加前には海外や語学には関心があまりなかった学生の中にも外国語学習や海外への関心を高める者も数多く存在し、短期留学を体験した学生や、様々な国への海外旅行に行った学生、留学生との友人関係を深め、彼らが帰国した後も交流も持ち続けている学生も複数見られた。

(4) 企画力・運営力などの向上

本事業の特色として、学生自身が企画を考え、立ち上げ、運営する「GET プログラム」の存在、及びそれを進める組織母体としての「学生企画運営室」がある。本事業に参加した学生の中には、この学生自らが企画し、運営すること自体に魅力を感じている者も多い。こうした学生は学生企画運営室の中核メンバーとなり、プレゼンテーション大会やカフェトーク、学外講座など様々な企画を立ち上げ、運営し、成功させてきた。普段の学生生活の中では、学生が自ら何かを企画し、運営してプロジェクトを完遂するという機会は少ない。学生自身が企画・運営を進めていくこの GET プログラムの存在こそが、本事業において学生の自主性、企画力、チームマネジメント力、時間管理力、協調性、プレゼンテーション能力など、様々

な能力の涵養につながっていることがわかった。

(5) 社会貢献・他者への関心

本事業の中で、ボランティアやインターンシップに参加した学生達は、それらの体験の中で得られた経験を積極的に自分の人生に意義づけしている。ボランティア活動に参加した学生は、普段の学生生活の中では出会えない様々な価値観や立場の人々と出会う中で、自らが社会に対して果たせる力の認識や、社会に対する見解を変えていったことがわかった。また、インターンシップについては、実社会の中で働く経験をすることにより、社会人生活の厳しさや仕事のやりがいについて感じる学生の実感を聞くことができた。

エ. グローバル人材についての考え方

本調査では、学生が活動を通じて「グローバル人材」についてどのような考えを持つようになったかについて、意見を述べてもらった。彼らが語った人材像からは、大まかに分けて以下の3つの要素がみられた。

(1) 異文化を受け入れる力

学生が考える「グローバル人材」像の中で、最も多く語られたのが異なる文化を持つ他者を受容するとの重要性である。参加する前は、留学生や外国人に対し特別な意識を持っていた学生たちも、彼らと関わる中で、同じ年代で同じようなことを考えている同じ人間だという意識を持つように変化していったことが調査の中で語られた。

学生の多くは、各個人がバックボーンとして持っている文化の違いを乗り越える力こそがグローバル人材として必要なことであり、そのためにはどんな国籍のどんな異なる文化を持つ人と出会っても、それを理解し、受容し、関わろうとする姿勢や力を高め続けることが重要だと語っている。

(2) 語学力の向上

次に学生が重視しているのが、語学力の向上である。学生達は、語学はあくまでコミュニケーションのためのツールにしかすぎないと感じてはいるが、それでもやはり語学力を高めることで相手とより深い理解がし合えるだろうという考え方を持っていることがわかった。学生の中には、本事業を通じて得た留学生の友人とより深い交流を求めて語学学習や海外旅行に取り組んで語学力を高めた者も数多く存在する。

(3) 日本文化への理解

同時に学生が重視しているのが、自国の文化に対する理解を深めることである。実際に、本事業で関わることが多いのは日本に興味・関心を持ってやってきた留学生であるが、参加した日本人学生の多くは、彼らと関わるうえで日本の歴史や文化に対する自らの知識の欠如を感じていることがわかった。そのような体験の中から、グローバル人材として重要なのは、ローカルな文化としての日本文化や歴史に対する理解を深め、他者に理解してもらえるよう説明できることだと考える学生が多数いた。

【6. 考察】

本事業では参加学生が獲得すべき能力・態度として、以下の到達目標を掲げている。

- 高い多文化理解能力
- 他国の言語を用いた高いコミュニケーション能力
- 課題を見極め、解決する企画力
- 主体的な行動力
- 社会貢献に対する高い意欲

本調査で学生の語りを分析した結果からは、積極的に本事業に活動した学生については、上記の諸能力を様々な活動を通して向上させていたことが判明した。ただし、本調査はあくまで学生の語りをベースにしたものであるが故に、そこで表明される能力の増進については学生による自己評価の域を越えないことに一定の限界があることは否めない。そしてまた、本事業に参加した学生の中には、実施されたイベントにほとんど参加していない学生も少なからず存在している。そうした消極的な学生群に対しては今回の調査対象としていないため、参加者全体の傾向として捉えることはできないことも本調査の限界として付け加えておく。本調査が示すのは、本事業に積極的に参与した中核的な学生がどのような成長を遂げたかということである。

以下に、各項目に関する学生の成長について、分析結果を再度まとめてみた。

(1) 多文化理解能力について

参加した日本人学生の多くは、様々なイベント・企画における留学生との対話や、インターンシップやボランティア等における留学生との協働によって、異文化に対する関心・理解が高まったと考えているし、また今後も異文化を受容できる自分の力量を高めたいと考えており、多文化に対する理解力が高まっているとみることができる。

(2) 他国の言語を用いたコミュニケーション能力について

本事業での諸活動を通じて外国語の学習への関心を高めたり、語学留学を経験したりするに至る学生が多数みられた。ただし、ここで注意したいのは、本事業を経験した学生は、外国人とのコミュニケーションには語学力も確かに必要だが、それ以上に相手と関わろうという積極的な姿勢・態度こそが一番大事だと考えている者が多いことである。日本人は外国人とのコミュニケーションには、高い語学力を身に着けてから行うべきだと感じる傾向が見受けられるが、留学生と多数関わった学生の実感としては、相手に関わっていく積極性こそが最も重要で、語学力はその次に来るものだと捉える傾向があったことをあえて記しておきたい。そのうえで、多くの学生が語学力を高める努力を行っている。

(3) 行動力・企画力について

学生の語りからは、企画の立案や運営を目的とした参加学生が一定数いることが明らかになった。彼らは学生企画運営室に参与して、本事業における様々な企画やイベントを立ち上げ、教員やコーディネーターのサポートを受けつつ、学生同士のチームワークによってそれらの実行を成功に導いてきた。これらのイベントに関わった学生達からは、自分たちの責任によって企画やイベントを成功させたことに対して大きなやりがいを感じていることが語られていた。本事業においては教員が主導した企画を学生にやらせるのではなく、学生自身に留学生との共修・協働力を高めていく企画を立案・実行させたことこそが学生の主体性や実行力、協調性、積極性、チームワーク力など様々な能力の成長に貢献したといえる。

(4) 社会貢献に対する意欲

学生の中でボランティアやインターンシップに積極的に参加した者達は、活動の中で様々な人々と関わりながら様々な体験をすることを通じて、実社会に自らが何らかの貢献ができる実感を高めていた。彼らの多くは、そこで得た経験は自らの社会に対する視野を広め、今後の自らの人生に対してポジティブな意味を持つと考えている。そのためか、多数のボランティアに参加した学生も一定数おり、こうした社会経験を本事業で提供できたことは、学生の社会貢献に対する意欲の向上につながったと考えられる。

(2) グローバル人材基盤形成プログラム修了証の授与

申請書段階では、修了者の成績上位者 30%を対象に、「グローバル人材証書」を授与することとなっていたが、

- 証書取得が、就職等におけるインセンティブになり得なかつたことから、証書取得よりも活動そのものを目的とする学生が多いこと。
- 学修期間等、様々な特性を有する大学間の連携事業という観点から考えると、成績上位者 30%という条件は、その取得者が一部大学に偏る等の課題があることなどから、「グローバル人材基盤形成事業修了証」に変更し、求められる資質・能力の育成活動への参加状況を踏まえた証書付与要件とした。

【付与要件】

- 各大学等が卒業要件として定めている 1・2 年次の外国語科目を修得していること
- 各大学等が指定する「長崎の歴史と文化科目」の中から 2 単位以上を修得していること
- 各大学等が指定する「キャリア科目」の中から 2 単位以上を修得していること
- 本事業実施するインターンシップ又はボランティア活動等を合計 3 日間以上修了していること
- 「学生企画運営室が実施する GET プログラム (Global Entertainment Training Program) を 3 回以上終了していること」を加え、要件の改善を行った。(※平成 27 年度から実施)

証書授与者

(単位：人)

	長崎大学	長崎国際大学	長崎県立大学	長崎純心大学	長崎短期大学	合計
平成 26 年度	26	11	—	7	8	52
平成 27 年度	10	14	2	—	21	47

【自己評価】

(1) 到達目標の評価方法

PROG 及び TOEIC 試験に関しては、顕著な数値的データを得ることができなかつたが、ポートフォリオ評価では、様々なイベントによる留学生との対話、インターンシップ並びにボランティア活動を通して、異文化に対する関心・理解が深まっていたことを面談等によって確認できた。これらの結果から、PROG 及び TOEIC 試験の評価方法の妥当性を検証できた。

(2) グローバル人材基盤形成プログラム修了証の授与

修了証の授与は、就職等におけるインセンティブになり得なかつた。その一方、修了証の授与よりもイベント等の活動を目的とした学生が目立つた。このような状況等を踏まえ、学生企画運営室が企画する GET プログラムを授与要件に加え、活動の活性化を図つた。

【外部評価意見】

- ・「国際的に通用する・・・キャリアを獲得する」という高いハードルに満たない点があり、また、企画運営委員に効果が傾いているものの、ポートフォリオに見られる学生の気付きや学びは非常に評価すべきと考える。認定証の意義付けやさらなるステップ（キャリア）アップに向けての工夫で、持続的な活動や意識向上に努めて頂きたい。

- ・ポートフォリオ等を用いてきめ細かな分析と評価がなされている点は高く評価したい。語学力（TOEIC 点数など）については、大きな成果は得られなかつたが、何よりも当事業に携わった学生達の留学生と係わる力や企画力、主体的に動く力が養われたことは大きな成果と受け留める。
- ・成果の可視化は大変困難であり、ポートフォリオなど現在行っているいくつかの方法を継続していくことが重要である。本事業は県内大学の学生が一緒に、しかも日本人学生と留学生が共に学び（共修）、インターンシップや地域貢献の社会活動をするもの（協働）であります。企画運営も学生主体です。学生はこの事業で、相手に関わろうとする積極的な姿勢、態度こそが一番大事だと感じています。如何に「学生のやる気」を評価してやるか、「前に踏み出したことを如何に認めてやるか」に係っていると思います。この体験は2~3年後、いや10年後、20年後に花咲くかもしれません。学生達が自分たちで考え、ストレスをつくり、体験し、ここちよいストレスを感じていく。評価すべき事業である。
- ・社会が求めるグローバル人材の評価のものさしが、なぜ「PROG」「TOEIC」であるか不明。むしろポートフォリオの項目から、グローバルリーダーを育成するプログラム等の明確な発信を含めて独自項目と評価を行った方がよいのではないか。
- ・修了証の価値は社会的認知があつてこそ、初めて価値をもつものと思う。企業等の意見を取り入れた評価を行うなど、学内ののみならず、社会を交えて構築を。
- ・そもそも目標を考えれば、評価の数値化が難しいことは理解できる。その意味からは、PROG及びプレゼンテーション能力の育成において、一定の効果がよみとれる結果を得たことは評価できると思う。TOEICの評価結果は解釈が難しいが、語学力の向上だけが目的ではないし、語学教育は各大学に委ねられていることを考えれば、致し方ないところである。
- ・県北の語学（コーディネータ等の）支援の取組みはすばらしい。主体的な行動力については、特に、企画委員の学生の成長がみられ、とてもよい。一方で、これらが留学生との共修・協働によって身についた（向上した）ものかどうかをもう少し探る必要がある。留学生力の活用が重要ではないか。
- ・ポートフォリオは学生自身が学びを確認する上で重要であり、インタビューも含めて丁寧に調査した上でポートフォリオを評価されたことは大変良かったと思う。今後はより多くの参加学生がポートフォリオを活用する仕組みが必要ではないか。外部評価委員等の第三者が活動の現場を見ていくことも評価の仕組みに取り入れてはどうか。
- ・ポートフォリオ評価が行われた。様々な取組による日本人学生と留学生との対話、インターンシップ並びにボランティア活動を通して、異文化に対する関心・理解が深まっていたことが面談等によって確認された。
- ・修了証書の授与は、就職等におけるインセンティブにならなかつたとのことだが、イベント等の活動への参加それ自体を目的とした学生が多かつたことは良いと思われる。

(1) 単位互換制度（NICE キャンパス）の概要とその改善

(2) 大学コンソーシアム長崎の国際化

本事業は以下の点において従来の大学コンソーシアム長崎を大きく変え、それぞれの大学の枠を超えて長崎県で学ぶ学生を地域で育てる土壤が形成される。

- 日本人学生中心から日本人学生と留学生の共修・協働体制への転換へ
- 教員中心の企画運営から学生中心の企画運営への転換へ
- 地域と協働した貢献活動等の全県的展開へ

(1) 単位互換制度（NICE キャンパス）の概要とその改善

平成 12 年度に開設された大学コンソーシアム長崎（愛称：NICE キャンパス）は、県外大学へ流出する 18 歳人口に対して、長崎県内の高等教育の魅力を高め、本県内大学等への進学を推進するために設置されたものである。その一環として実施されてきた単位互換制度は、各大学で開講されている授業科目の一部または NICE キャンパスのために新たにコーディネートされた授業科目の中から希望する科目があれば、他大学開設科目であっても自大学の単位として履修・修得することが可能なシステムである。

しかし、各大学既設科目を単位互換科目に指定しても、授業時間帯が異なることや地理的制約により、単位互換の実績を上げることが困難な状況があり、結果として、10 大学学生・留学生による共修が進まないという課題が、当初から想定されていた。そこで「大学間連携共同教育推進事業運営委員会」や「大学コンソーシアム長崎運営委員会」の中で、単位互換科目（共修科目）の合宿、集中、遠隔授業化について検討を重ねてきた。

その結果、平成 25 年度の「考え方！自分のキャリアデザインⅠ（合宿・集中型）」、「考え方！自分のキャリアデザインⅡ（合宿・集中型）」、平成 27 年度の「高めよう！プレゼンテーション力（合宿・集中型）」が開講・単位化された。

また、コンソーシアムの国際化を推進する立場から、平成 29 年度から、グローバルリーダーの資質育成を目的に、合宿・集中型の「グローカルリーダー育成基礎講座」、とびたてジャパン事業と連動した「長崎グローカル人財育成講座」等を開講・単位化することとしている。

加えて、これまで課題であった「長崎の歴史と文化科目」についても、「歴史と文化」限定から、広く地元長崎を学ぶ内容（歴史、文化、自然、産業、平和等）に履修科目を拡充し、遠隔型で行われる長崎大学開設の COC+事業と連動した長崎地域学科目についても、単位互換科目化の検討を進めているところである。

なお、日本人学生と留学生の共修体制や講義中心の授業は、アクティブラーニングを用いた学生主体の学習方法へ転換している。

しかし、大学コンソーシアム長崎を、国際社会型、地域協働型、学生主体型のコンソーシアムとして発展させていくためには、支援終了後も NICE キャンパスのさらなる改善が、喫緊の課題である。

(2) 大学コンソーシアム長崎の国際化

①実施体制の見直し

平成 28 年度末をもって、本事業に対する国の財政支援が終了するにあたって、県内大学・短期大学等理事長・学長会から指示され、本事業の継続に向けた体制づくりを協議する委員会（コンソーシアム統合に向けた協議会）を設置した。当該協議会では、県内の大学等が連携し、長崎を舞台に日本人学生と留学生とが共修・協働を通じて国際人、社会人としての基盤を形成するという趣旨をより明確にするために、事業名を「長崎発グローカル人材基盤形成事業」と改めるとともに、下記に示すような改善の

方向性が示された。

支援終了後の上記実施体制については、大学コンソーシアム長崎運営委員会及び大学間連携共同教育推進事業運営委員会で承認を得、既に規約等の改正も済ませてきたところである。

- 本事業を、大学コンソーシアム長崎の事業として継続すること。
- 未加入であった佐世保工業高等専門学校も本事業に参画すること。
- 「大学間連携共同教育推進事業運営委員会」を、「大学コンソーシアム長崎運営委員会」に統合すること。
- 本事業の学生組織である「学生企画運営室」とコンソーシアムの学生組織「学生連絡協議会」を統合し、「学生企画運営協議会」とすること。
- 引き続き長崎大学を県南拠点校、長崎国際大学を県北拠点校とすること
- 本事業の事務局を長崎大学地域教育総合支援センター社会教育支援部門に置くこと。など

②事業スキームの見直し

これまでも日本人学生と留学生の共修・協働を実質化し、グローバル人材としての基盤形成に寄与するプログラムにするために様々な改善を進めてきた。申請書では、本事業の修了要件を

- 各大学が指定する外国語科目、長崎との歴史と文化科目 キャリア科目 の3科目
- インターンシップ又はボランティア活動 3日以上

と定めていたが、本事業において大きな成果を上げているGETプログラムへの参加（3回以上）を上記要件に加え、修了証付与要件とした。加えて、日本人学生と留学生の協働に課題のあったインターンシップについては、3年次における単位化されたインターンシップにおける留学生等との協働活動までを視野に入れた修了要件とすることも検討している。

事業成果の可視化については、全大学共通の取組としてポートフォリオ評価を継続する一方、財源がなくなることから、社会人基礎力テストやTOEIC等の語学検定については実施大学のみの成果指標として活用するとともに、修了証取得者数、海外留学者数（日本人学生）、海外旅行数等、様々な観点から学生の成長をモニターできる取組の継続を図っていきたい。

③ 学生主体による地域貢献活動の充実について

本事業は、学生企画運営室の活発な活動によって支えられてきた。一方、大学コンソーシアム長崎の学生組織である「学生連絡協議会（ちゃんぽんネットワーク）」も地域のステークホルダーと連携した地域貢献活動に実績を有している。この2つの学生組織の統合によって、これまでの経験、人脈、ノウハウ等を一元化し、GETプログラムやボランティア活動を軸に、学生主体による地域協働型の事業への転換を現実化することが可能となる。このことを実現するために上記①～②に述べた運営体制の見直しを図ったものである。

【自己評価】

（1）単位互換制度（NICEキャンパス）の概要とその改善

NICEキャンパスの単位互換授業科目が、他大学の開設科目を受けられる環境になっていないため、結果的に大学間の実質的な共修を困難にしてきた。このため、連携する全大学は、合宿、集中又は遠隔等の多様な実施方法を検討し、受講者の増を図ることとした。

(2) 大学コンソーシアム長崎の国際化

一部の授業について、留学生との共修、学生主体の学習方法へと転換されたが、本事業の展開が大学コンソーシアム長崎の国際化に充分に寄与したとは、現状において言い難い。しかし、地域と国際化に資する人材を育成する講座が平成29年度から新設・決定されたため、本国際化が進展するものと思料される。

【外部評価意見】

- ・学生企画運営室による主体的な活動の維持が最も優先すべき事項と考える。是非、持続的な大学側のサポートをお願いしたいと共に、大学だけでなく、企業や他団体（長崎サミット関連等）に本事業の意義を理解し協力してもらうような活動も必要と考える。
- ・初年度よりこの事業をオブザーバーしていた立場として携わってこられた運営協議会や学生企画委員会のご尽力に大いに敬意を表したい。実際に、学生達と直接話す機会が多く、彼らの成長ぶりには目をみはるものがある。今後も当事業の組織が一本化され大きな改革を成されることを期待している。
- ・NICE キャンパスについては、平成29年度からの事業も具体的に予定されていること、また、「長崎の歴史と文化科目」についても拡充策の検討が進められており、評価する。早期に改善されることを願っている。
実施体制についても、一定の方向性が示されており、大学間連携が更に深化していくことを期待している。
- ・全大学の連携のために合宿、集中、遠隔等の共修方法を実施され、受講者を増やす取組みに工夫が見られ、実績も上げている。
- ・平成29年度以降、地域ステークホルダーとの連携を強化し、地域協働型事業として学外との関係性を強化される点は大いに期待できる。
- ・県内の大学の単位互換制度を中心とするNICE キャンパスと留学生との共修・協働による人材育成を行う本事業は目的や視点が異なっているが、これらをうまくリンクすることで、発展性、地域の特色ある人材育成が期待できるし、実際に学生の企画室委員の活動などでは、効果があらわれている面もあり、高い評価が与えられる。
- ・今後の実施体制や事業の見通しが、これまでの成果や課題を踏まえて具体化されつつあることは、高く評価できる。今後はより具体的に個別の内容に踏み込んで、見直しが行われていくことを期待したい。例えば、企画委員の学生達にとっても、ある意味立ち上げ時期にあった一期～三期生までは、全てが新しい取り組みであり、学びの場であったかもしれないが、長く続していくと、定常的な事業となってしまい、運営することが中心となって、学生の協働の場としての魅力が失われるという心配もある。今後の体制作り、仕組み作りにおいて、発展性が（具体的に）期待できるように、大学間の協力を含めて継続的に見直しを行っていただきたい。

- ・当初考えられていたことと異なる部分（学生の成長、GETなど）の成果は大きいと思うので、ぜひその良い点を今後も継続的に伸ばしていかれることを願ってやみません。
- ・事業の展開が大学コンソーシアム長崎の国際化に充分に寄与したとは、現状において言い難いとのことだが、地域と国際化に資する人材を育成する講座が平成29年度から新設されることは、今後の継続・発展の基礎になると思われる。

【総合評価】

(各評価委員のコメント)

- ・県内の大学間の連携など地理的制約のあるハードルの高い目標であったが、学生企画運営室を支える取組などにより、活発な活動が継続的に行われたことを考慮すると、事業が概ね達成されたことに相違ない。
- ・充分な結果が得られた取組みであったが、グローバル人材が社会的にどのように貢献するのかとのイメージを持っていたので、違った視点もあったと思われた。しかし、平成29年度以降はグローカルな人材育成という明確な目標を設定されているので、これを応援し期待したい。
- ・連携の困難さの中で事業を進め、学生の意欲を引き出した、すばらしい事業であった。教育は、10年後、20年後に大きな花を咲かすものと認識している。今後も支援したい。
- ・グローバルが何であるかを自問する中で、学生がリアルに大きく成長していることを目の当たりにして、大きな成果が得られていると感じている。今後も大きな期待をしている。
- ・高いハードルを掲げて出発され、NICEキャンパスにおける課題を抱えながらの事業であったが、当初考えられていたもの以上の成果、又学生の成長があった。今後は、ある意味これまでの縛りから解かれることになると思うので、これまでの事業で築かれた優れた点を活かし、新たな目標をもって大学間の連携事業を推進されることに期待したい。

A : 充分に達成している
B : ある程度達成している
C : あまり達成していない
D : 全く達成していない

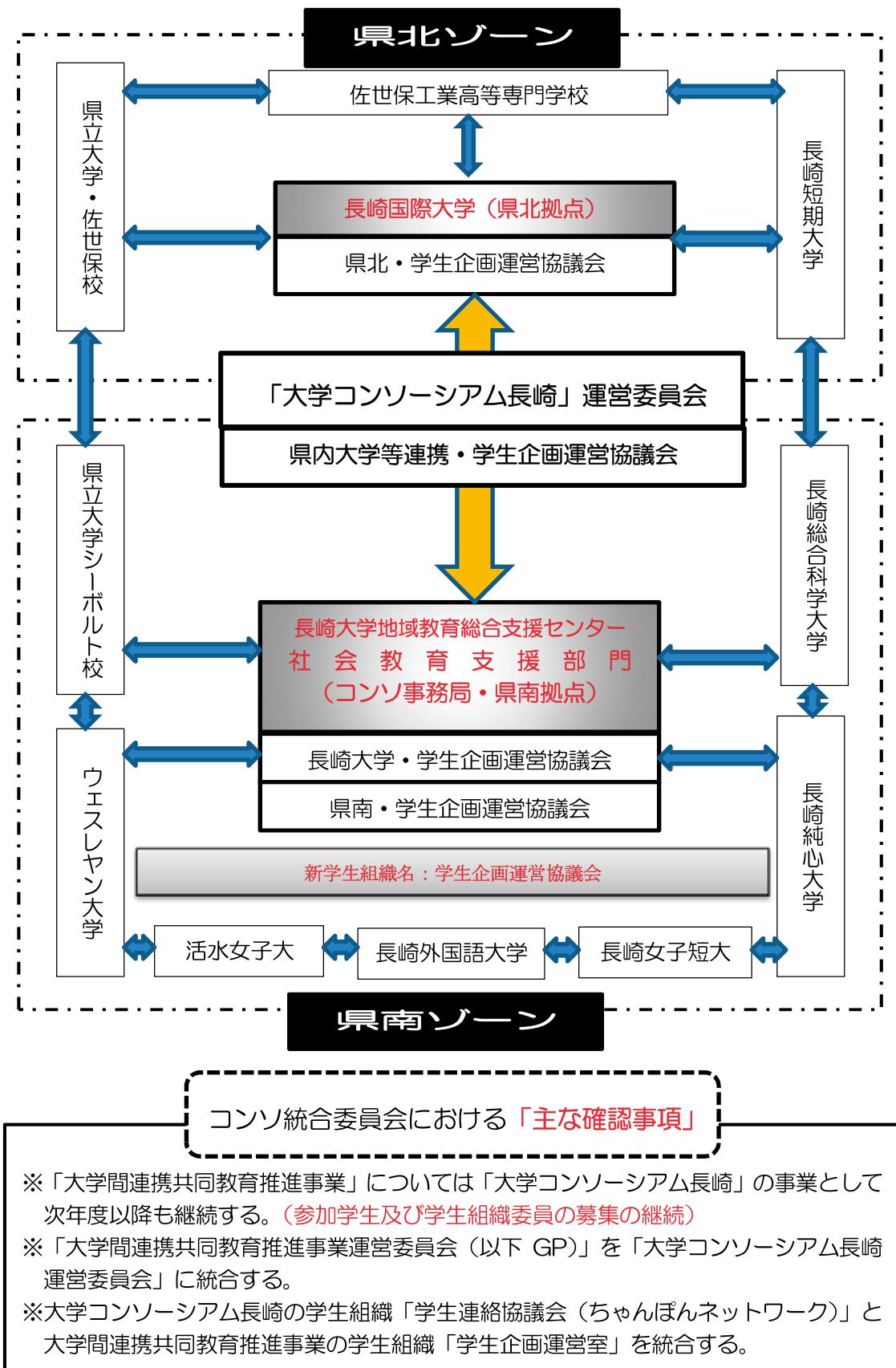
【外部評価委員会委員名簿】

氏名	所属	本事業規約第3条に定める委員
小林秀顕	稻佐山観光ホテル 代表取締役	1号委員（企業関係者）
中山健司	佐世保市役所 企画部国際政策課長	2号委員（地方公共団体関係者）
杉光正弘	公益財団法人長崎県国際交流協会 事務局長	2号委員（地方公共団体関係者）
◎香野淳	福岡大学理学部 教授	3号委員（大学関係者）
園田貴章	佐賀大学教育学部 教授	3号委員（大学関係者）
田中美吉子	インターナショナルエアアカデミー長崎校校長	4号委員（公募委員）

※◎は委員長

【参考資料】

平成 29 年度以降の「大学間連携共同教育推進事業」の運営について



留学生との共修・協働による
長崎発グローバル人材基盤形成事業

外部評価報告書

平成29年3月



長崎発グローバル人材育成プログラム

●実施運営南部分室（長崎大学地域教育連携・支援センター内）
〒852-8521 長崎市文教町1番14号
Tel 095-819-2888

●実施運営室北部分室（長崎国際大学内）
〒859-3298 佐世保市ハウステンボス町2825-7
Tel 0956-20-5817